

Libro de Alexandre (V)

Translated by OTA Tsuyomasa

Abstract

The Libro de Alexandre is a great epic poem that consists of 10700 lines and was supposedly written in the first third of the thirteenth century. This poem is not an ordinary biography of Alexander the Great, because the story is interrupted by many diverse episodes such as that of the Trojan war which took place about 1200 years B.C. according to historians, and that of the Old Testament. Alexander the Great is a personage of the fourth century B.C. and this poem is written in the thirteenth century AD. So, in this work by an unknown author, perhaps a cleric, a mixture of ages is seen everywhere and that is the most remarkable characteristic of this epic poem.

This work is written in the erudite form of *cuaderna vía* (four-fold way), the style of which has been called the *mester de clerecía* (scholars' art) as compared with the *mester de juglaría* (minstrels' art).

This translation covers from the strophe 803 to 1001.

アレクサンダーの書 V

太田 強 正 訳

アレクサンダーの書は 13 世紀の最初の約 30 年の間に書かれたと推測される 10700 行からなる大叙事詩である。

これは 33 歳で早世したアレクサンダー大王の伝記であるが、普通の伝記とは異なり、大王が活躍した紀元前 3 世紀、トロヤ戦争が起こったと言われる紀元前約 1200 年、そしてこの叙事詩が書かれた紀元後 13 世紀の話が混然として描かれている。

作者は無名の聖職者であろうと言われているが、Gautier de Chatillon の *Alexandreis* を底本として、その他の伝記、伝承を基にこの叙事詩を書いたようである。

作品はメステル・デ・クレレシーア (*mester de clerecía*) と呼ばれるもので、中世スペインの主に聖職者による教養階級の文学の流派のものである。これは文字の読み書きのできない吟遊詩人 (*juglares*) によるメステル・デ・フグラリーア (*mester de juglaría*) と対をなすものである。

形式はクアデルナ・ビーア (*cuaderna vía*) と呼ばれる 1 行 14 音節同音韻 4 行詩である。

今回は第 803 連から第 1001 連までを掲載する。

訳は言葉が違うので韻を踏ませることはできなかったが各行ごとに付けた。そのため日本語として通るように原文にない接続詞などを補わなければならない箇所があった。

人名・地名などの固有名詞は原則、原文に従いスペイン語読みとし、日本で普通用いられているものについてはそれに従った。

翻訳に当たっては現代スペイン語訳の他、英訳を参照した。また部分訳ではあるが日本語訳も参考にした。

803 一方ダリウス王は慎重な男として
開戦の御触れがペルシャ全土に行き渡るように命じました
一ヶ月で出発しなかった者は
財産と身体に罰を受けるだろうと

804 ダリウス王は善意に満ち
穏やかで正義感が強く、非常に情け深い人でした
そして人々は善良でとても忠誠心厚かったので
喜んで命令に従いました

805 数日で皆が集まりました
無数の雑多な
いろいろな家柄の人々で、皆軍旗を持っていました
—遅れて来た者たちは誤ったと思いました—

806 彼らは遠い地から、いろいろな辺境からやって来て
いろいろな言語を話していました
昼も夜も混んだ道をやってきました
人々は楽しげで結婚式にでも来たようでした

807 人々は大勢いて、衣装はさらなるものでした

色とりどりの軍旗と馬衣が見られ
地は花で飾られたようでした
一人々は自分たちが良き擁護者であることを示したかった
のです—

- 808 全軍がが一つにまとまると
皇帝ダリウスは喜び、満足しました
とても嬉しく思っていたので、皆に感謝しました
なぜなら自分の命令にこんなによく従ったからです
- 809 軍勢の中ほどに大きな丘がありました
ダリウス王は収税官とともにそこに登り
四方を見渡すと、民全体が見えました
彼は言いました：《逆らう王子は私に税を払うべきだ》
- 810 王は大きな布の袋を持ってくるように命じ
ケシの種でそれをいっぱい膨らませました
それから秘書に書状を書くように命じ
次のように書いてギリシャ人に送りました
- 811 《男たちよ、考えてみなさい、私はお前たちに忠告したい
このお前たちの主人がお前たちに何をすることを望んでい
るのか考えなさい
誰も私の力を計ることはできない
お前たちがこの種を数えることができないように

- 812 私たちは話に聞いている、ギリシャの男たちは
財産は乏しいけれど、知恵には富んでいたと
しかしお前たちは狂った傲慢さに陥り
それをひどく後悔するだろうことを私は知っている
- 813 そのようなひどい狂気を持ったお前たちは
狂った節度のない若者の話を聞く
お前たちは皆非常な不運に見舞われるだろう
彼はお前たちをバカにしているので、それを気に掛けない》
- 814 ギリシャ人たちがダリウス王の伝言を受け取りると
すぐに彼らの中で敵意を示す騒ぎが持ち上がりました
アレクサンダーは彼らに言いました：《誰がこのような侮辱を見
たろう
私たち皆をあのアルサニオの息子がしているような》
- 815 アレクサンダーはすぐに袋を取り、種を取り出し
口の中に入れて、噛み始めました
《甘くて—と彼は言いました—柔らかく、食べやすい
ベルシャの民々もこのようだと知りおくがよい》
- 816 それから袋を取り、それを胡椒で満たし
血の色のインク⁵⁹⁾で書状を書きました
アレクサンダーは言いました：《私たちをこんなにけなす
あのおしゃべりは
私が後悔させなければ私を苦しめることになる

- 817 私はお前たちに袋の中身の意味が何なのか知ってほしい
—おしゃべりなダリウス王よ、お前にはそれを言おう—
お前は大量の小さな種を送ってきた
私はこんな食べやすい物を見たことがない
- 818 胡椒の一粒はもっと苦い
袋一杯のお前のくだらない物よりも
強く我慢強い民であるギリシャ人はこのようにするものだ
我々の一人の方がお前の血筋の千人よりも価値があるの
だ》
- 819 アレクサンダーはペルシャの使者に十分な金を与えて送り
返し
これ以上の伝言をもって来ることを禁じました
そこに来る者は誰でもひどい目にあって帰って行くことにな
るからです
なぜならこの件に関して為すべきことはなかったからです
- 820 ダリウス王がアレクサンダーには計略が通じないと分かっ
た時
王が激怒しなかったと言えはウソになるでしょう
セルシスがしたように兵を呼び集め
翌朝に出発するように命じました
- 821 ダリウス王はユーフラテス河のほとりに兵を配置するよに
命じました

—それは大河で、ほとんど海のように—
 そこでどうするのか決めることになりました
 前進するのか待つのか

822 しかし出発する前に悪い知らせが入りました
 アレクサンダーがメノナ⁶⁰⁾を殺したと
 彼の持っていた物はなにも残っていないと
 《ゲームは—とダリウスは言いました—真剣勝負になった》

823 メノナはメディアの出で、危険な戦士でした
 —ダリウス王の宮廷で彼ほど勇敢な者はいませんでした—
 ギリシャ人に対しては先頭に立つと豪語していて
 コイン一個でギリシャ人三十人を引き渡そうとしていまし
 た⁶¹⁾

824 ダリウス王は彼に望むだけの兵を与えました
 七万人の戦う貴族たちです
 皆非常に勇ましい、勇敢な男たちです
 —歯だけで世界を征服できるに違いありませんでした—

825 彼らは大勢で、用意周到でしたが
 アレクサンダーは打ち破り、彼らは敗退しました
 隊長は死に、他の者たちは敗走しました
 《神によって—と野蛮人たちは言っています—私たちは初
 戦退敗した》

- 826 とてつものなことのようですが、書物がそう言っています
この戦いは丸三日続いたと
太陽はそのすぎましさに輝きをなくし
日々の光の三分の一以上を失いました
- 827 ダリウス王はこれらすべてのことに対しても怯もうとしま
せんでした
できるだけ自分の苦しさを覆い隠しました
彼は言いました：《運はたやすく変わるものだ
人間にはそういうことはよく起こるものだから》
- 828 立派な髭のアレクサンダー王は
メノナとの戦い勝利を納めると
一つの町を包囲し —サディス⁶²⁾ という名でした—
猛攻撃をかけ、武力でそこを占領しました
- 829 サディスのある所でアジアは狭まり
周りを二つの海が取り囲んでいて
前には底の知れないサガリオ河⁶³⁾ が流れています
誰も船橋なしではそこに到達できなかったでしょう
- 830 あの全兵力もアレクサンダーには全然役立ちませんでした
彼は町を速やかに制圧したのでした
そこにミダス王が素晴らしい邸宅を持っていました
それで町全体が《ミダスの家》と呼ばれていました

- 831 その寺院に絡まった結び目の紐がありました
それはミダス王の時代にしっかり結ばれたもので
非常に込み入っていて、魔法がかけられてありました
アジアの統治はそこに予言されていました
- 832 それはお互いに絡み合った枝のようで
どこで結ばれているのか分かりませんでした
飾り糸のように見えたが
結ばれ方が尋常ではありませんでした
- 833 書物にある通り、予言されていました
それを解く者は皇帝になれ
アジアの帝国すべてを指揮し
世界中の誰も抵抗できないだろうと
- 834 アレクサダーはその名誉を得るために喜んで
その結び目を解くためにあらゆる努力をしましたが
王の骨折りは届きませんでした
結び目の入り口を見つけることができるほどには
- 835 ギリシャ人たちは皆途方に暮れ
アジアを征服することに失望していました
彼らは心の中で言いました：《私たちはひどく欺されている
私たちはたぶらかされているのをこの目で見ているのだ》
- 836 アレクサンダー王は賢かったので

言いました：《男たちよ、お前たちの疑念を晴らしてやろう》

彼は剣を抜いて、結び目を細かく切り刻み

言いました：《私が思った通り、結び目は解けた

837 私は他の方法ではどうしたら良いのか分からなかったろう

ともかく私が結び目を解くことになった》

《ご主人様—と皆が言いました—神があなたを永らえさせ

てくださいますように

なぜならもっと上手に解決できなかったでしょうから》

838 これが神の助けで片付くと

王は自分の軍を移動させるよう命じ

素晴らしい城であるアルキラ⁶⁴⁾を包囲しましたが

事は僅かの時間で終了しました

839 そこから王は選ばれた兵力を送りました

カパドキアを征服するために勇敢な兵士たちを送ったので
す

しかし彼の全努力は何の役にも立ちませんでした

彼らは残念なことにたちまち破れてしまったのです

840 ダリウス王の軍から確かな情報がもたらされました

軍はユーフラテス河の岸の近くにあると

すでに平らな所で彼らと相見えようとしていました

各々どれだけの者で何者なのか確かめるために

- 841 山々は高く、勾配が急でした
道は狭く、曲がりくねっていて
危険な山岳民族が住んでいました
ギリシャ人たちは何か奇襲を仕掛けられうのではと恐れていました
- 842 途中で攻撃を仕掛けられ
野蛮なペルシャ人たちのところにたどり着けないのを恐れて
ギリシャ軍は並外れた夜間行軍をして
1日で63マイル馬で進軍しました
- 843 ギリシャ人たちは心配していました、報告があったので
ダリウス王の軍が翌日動くだろうとの
それで彼らはできるだけ急ぎました
ペルシャ人たちがいなくなってしまうのではないかと恐れていたからです
- 844 ダリウス王は直ちにギリシャ人たちがいかに移動したか知りました
彼にはこれほど悪い知らせはなかったでしょう
そのことをすぐに将校たちに知らせました
—お前たちに違うことを言う者は誰でも、非常に混乱していたのだ—
- 845 しかしダリウス王は言いました：《私たちは嘆くべきではない

私たちは数も多く、優れている、だからたやすく彼らを打ち負かすだろう

さらにそうでなくとも、我々には他の理由がある
世界中が我々には権利があると知っているのだから

- 846 アレクサンダーはメノナを破ったので、あんなに思い上がっていて

いつまでもこんな事が続くと思っている
もし狂人が自分がどのように欺されるのか知ったら
己が狂気に非常に驚くだろう》

- 847 こうしているうちにすでに夜が開けようとしていて

空が真紅に染まり始めました
良きペルシャ皇帝は軍を移動させるよう命じました
なぜなら自分自身から不安を取り除く事ができなかったからです

- 848 その時ラッパと角笛が吹かれ

双方の太鼓が打ち鳴らされました
その音は大きく激しかったので
天地が震えているようでした

- 849 ダリウス王は軍にもっとまとまるように命じました

事が起こった時に用意ができているように
彼は皆が武器を手に行っているように命じました
あたかも戦いがあると確信しているように

850 彼らは聖遺物として神聖な火を持ち歩いていました
—いつも灯されていて、決して消されることはありません
でした—

それは金の荷車に乘せられ先頭に据えられていました
銀の祭壇の上にしっかりカーテンで囲まれて

851 ジュピターの像は他の神々と共に
多くの司祭に守られてその火の背後に据えられていました
その一行は大きな十台の荷車で運ばれていました
それらは純金と宝石で出来ていました

852 各地方の十二の部族
異なった服装と異なった言葉の部族を
少なくともたっぶり十二の軍団に相当したでしょうが
王はこれらにその行列の警護に当らせました

853 学者だけを乗せた戦車が一万台以上ありました
彼らは王の補佐官に任じられた者たちでした
ある者は司祭で、他の者は騎士でした
—誰もが彼らが同類だと分かったでしょう—

854 その後に選ばれた一万五千人が続いていました
皆がダリウスのよく知られた親戚で
高貴な衣装である白いトーガをまとっていました
—彼らは同じ日に生まれたように見えました—

- 855 真ん中に非常に貴重な人物であるダリウスがいました
— 預言者のようでした、それほど素晴らしかったのです—
彼の乗った車は非常に美しかったです
それを見ることができた者は幸せだと思いました
- 856 スポークは金で、非常に丹念に作られていて
車輪もとても輝いていました
車軸はより良い音を奏でるように上質の銀で
車台は良い香りを放つように糸杉で作られていました
- 857 車の前部を価値がないと思わないでください
すべて非常に上質の象牙で縁取りされ
すべてノミで細工がしてありました
そこには千以上の非常に価値のある宝石がちりばめてあり
ました
- 858 スポークの先はうまく打ち込んでありました
宝石で上手に出来た棒で
これらはすべて巧みに宝石を埋め込んであり
一体になっているように見えました
- 859 あなたたちにくびき、あるいは横木についてお話ししまし
よう
— 新しく考案されたギリシャ式のものです—
— 一匹の蛇が丸ごとかかえたもので
非常に細い金の鎖で出来ていました

- 860 ダリウスの王座は非常に値の張るもので
脚は上質の金で、肘掛は銀でできていました
それらを固定するリングはもっと価値がありました
全ダミアタ⁶⁵⁾の収益よりも
- 861 脚は四匹のライオンの上に乗っていました
生きているようでした、それほど真に迫っていました
頭にはそれぞれグリュプス⁶⁶⁾が乗っていて
各々足で野獣を押さえていました
- 862 王の上には暑さを和らげるため
丹念に細工した鷲が据えられていました
より大きな影を作るため羽を広げて
常に王を心地よく保っていました
- 863 車にはすべての神々が描かれていました
そして三つの天⁶⁷⁾がどのようなものか、何が住んで
いるのかも
上部は非常に明るく、白い服をまとった者たちで満ちてい
ました
下にいる他の者たちももっと淡い色で描かれていました
- 864 この他に後方と前方には
一万の護衛が皇帝の近くにいました
皆銀の輝く槍を持っていました
その穂先はキラめく金の光沢がありました

- 865 さらに近くに二百人の鎧をつけた兵士を従えていました
皆諸王の嫡子で
すべて若者で生えてばかりの髭を蓄えて
見目麗しく立派な体格でした
- 866 ダリウスは軍を救うためにまだ他のことをしました
ギリシャ人たちが打ち破ることができないようにしたのです
彼は優秀なもう三万人の兵士を配置しました
後衛を導き、軍を護るために
- 867 王の傍には妻の王妃がいました
高価なカーテンで囲まれた高価な車に乗って
そして一人の息子と二人の娘、そして多くの華やかな女性
随員が
最後に非常に多くの財と共に母親が
- 868 そこには五十台の車が、皆豪華に飾られて
すべて王の側女たちを乗せていました
これらの婦人たちを守るために、そこには二千人の宦官が
いました
—子供の時に皆切り取られていました—
- 869 オリエントの王たちは皆習慣をもっていました
戦いには全宮廷を引き連れて行くという
かなり古くからその様にしていました
しかしダリウスにとってはそれは不吉なことでした

870 彼らは財宝を運んだ三百頭のラクダを連れていました
そしてその後に六百頭の荷を積んだラバが続き
それらは皆荷を積み過ぎていたので
毛から汗が滴っていました

871 十万人以上の鎧をつけた兵士がいました
彼らは大弓と投石機を使い慣れていました
他の近隣の村々から集めた歩兵隊については
十人の書記でもあなたたちに説明できないでしょう

872 この様にダリウスは自分の軍を整えていて
当然のこと、軍は良く訓練されていました
良き兵士たちによって全軍が良く指揮されていました
全軍は良く準備されたすべての武器を帯びていました

873 大そうなことで、諸民族は数が多かったので
列は十五マイルになり
諸民族の喧騒は丘々を覆っていました
ラッパ手の鳴らす音で耳が聞こえなくなるほどでした

874 こういったすべての知らせと、騒音で
ダリウス王はまったく気が遠くなりそうでした
なぜならメノナの死が彼を意気消沈させたのです
というのは事際、貴重な片腕を失ったのですから

875 ダリウスに恐れがなかったというわけではないことは、誰

でも想像できたでしょう
なぜなら配下に自分の領地の辺境を略奪させ
要塞を破壊し、焼かせたのですから
というのはそれらをあえて—私は思うのですが—守ろうと
しなかったからです

876 逃げることを知らなかったアレクサンダー王は
ゆっくり眠ろうともしませんでした
征服のことは全然考えていませんでした
というのはダリウスと戦うことで死にたかったからです

877 しかし彼は町や
城や村や他の土地を自分の物と考えていたので
どんな所でも何も奪いませんでした
行き先々で人々に安全を保障しました

878 彼はどの様にしてペルシャ人たちがタルソに火を付けたか
を聞きました
それはすべて良く整った王の町で
そこから勇敢な舌を持った使徒⁶⁸⁾が出たところでした
王は町が燃え尽きる前に火を消すために人を送りました

879 それでまったく抜け目のないパルメニオがすぐ駆けつけま
した
彼は町に入りできるだけ消しました

それから勇敢な王が到着しました
時を置かず火は消し止められました

880 王は動揺して上気していました
火の熱のせいで体調をくずして
彼は経験したことのないことを経験しました
健康はいつも同じ状態で続くものではないと

881 6月で暑い時期でした
太陽が獅子座の所に来ていました
少なくとも十五日は経っていました
—この事からして、優に月の半ばは超えていたようです—

882 天候は厳しく、太陽は燃えていて
人々は皆暑さで死にそうでした
シリア⁶⁹⁾は特に熱風が吹いていました
太陽の暑さがそこをひどく苦しめているからです

883 町の中を水量の豊かな川が流れています
それはその土地と同様に素晴らしい川です
山脈で生まれ、谷を下って来ます
逆巻く水の下に砂地があるようです

884 王はそこで水浴をしたくなりました
非常に美しい流れで驚嘆するほどでしたから
そこではもう少しで不祥事が起こるところでした

川のことで世界中が争いを起こすような

- 885 王は武器を置き、衣服を脱ぎ
—臣下もよそ者もそれを不安に思いました—
両足で川に飛び込みました
—水浴はあまりしたことがないようでした—
- 886 体は暑く、汗をかいていて
水は冷たく、風が吹き荒れていたのだ
王はその水浴で非常に具合が悪くなり
判断力も意識もなくなり、ほとんど死んだようになって倒
れました
- 887 ギリシャの兵士たちはこれを見ると
皆手で頭を叩き
王を素早く川から引き上げました
そこにいる者は皆こんなに悪い日を経験したことはあり
ませんでした
- 888 王の死をたやすく隠しておくことはできないので
たちまち全軍がそのことを知ることになりました
その時ギリシャ人たちははっきりと見ました
戦闘に赴くには悪い助けを得たものだ
- 889 彼らは非常に悲しみ、驚きは大変なものでした
そこにいる者たちは皆その様な苦痛を味わったことはあり

ませんでした

皆、子供も大人も死を悼み泣きました
泣き叫ぶ声は四方に広がって行きました

890 彼らは悲しみを口にしながら頭を叩いていました

《惨めなものだ、なんと私たちは運が悪いんだ

私たちは悪い時に母親から生まれた

一年間無駄にしに來たようなものだ》

891 彼らは言いました：《ご主人様、誰がこんなに見捨てられた者たちを見たでしょう

私たちは悪い時にあなたに見放されました

私たちはあなた故に世界中から挑まれています

そして自身を守る準備ができていません

892 ダリウス王は私たちの近くに迫っていて、逃れることはできないでしょう

あなたなしでは、あえて戦闘を始めることはないでしょう

彼らは山脈を押さえていて、引き返すことはできません

私たちはここで罪の報いを受けるでしょう

893 故郷に帰れるとしても

あなたなしでは、そこにあえて顔をだすことはしないでしょう

主人のない臣下は自分を護ることができません

ご主人様、私たちはどの地に住んだらいいのでしょうか

- 894 ご主人様、あなたを導いていた幸運は
あなたに悪意を持ち、あなたを悪い場所に置き去りにし
ました
生きた人間はそんなものには決して頼るべきではないでし
ょう
それは自分の友達に悪い褒美を与えることができるので
す》
- 895 幸運の女神は非常に侮辱されたと思いました
しかし彼らがバカなのを見て何もしませんでした
ひっくり返った車輪が回り始めました
王は一度に目を覚まして行きました
- 896 王にだんだん感覚が戻り、意識を回復しました
良くなって行きましたが、完全には回復していません
でした
王は臣下に言いました：《おじけついた兵士たちよ、
私は傷を負わずに負けたこんなにたくさんの人を見たこと
がない
- 897 私はまだ生きているのに、お前たちは死んだと思っている
お前たちは良い輩なのに、悪い慰め方をしている
どうも喜びのうちに集うことを知らないようだ
本当の事を言うておくが、お前たちは私にひどい扱いをし
ている

898 私たちの隣人ダリウス王が、もし良き戦士であったなら
私を子羊のように連れ去ることができるだろう
私は知らない土地で一人苦しむことになるだろう
私たちのすべての苦難は何の役にも立たないだろう

899 しかしもし誰か医者が私を治せるなら
まだ今は死にたくない
そして生きたいと思うからそう願うのではなく
ダリウス王と戦いうことを望むからだ

900 ただ馬にまたがって
そして戦場で臣下の前に立てれば
ペルシャ人たちは意に反して破れるだろう
そして我が軍はしなれている事をするようになるだろう

901 大きな喜びが軍を覆いました
ご主人様の回復が判ったからです
しかし多くの者が心配していました、その大胆さで
ひょっとして結局また悪くなるのではないかと

902 王を診ていた医者の方エリポは
一素晴らしい医者で、人体をよく知っていました—
王に下剤を与えると約束しました
確実に彼を回復させるような下剤を

903 その医者が告発されたのはこの時でした

ダリウス王が彼を騙して
広大な領地と共に自分の娘を与えると
もして彼がアレクサンダーに復讐してさえくれば

- 904 誹謗者の言ったことはすべて嘘でした
—医者に激しく嫉妬していたので、そう言ったのでした—
王は医者をよく知っていたので信じませんでした
いつも彼をととても愛していました、彼はそれに値
していたので

- 905 誹謗者が誰だったかは言いたくありません
—非常に高貴な人だったので、隠しておきたいのです—
彼は他の事では王に良く仕えることができました
しかし結局悪い死に方をすることになったのです

- 906 医者は戸棚から薬を出して
すべてのもっとも上等な薬から薬剤を調合しました
そこにはダリウス王の毒薬を少しも混ぜませんでした
そのような金を受け取る習慣がなかったからです

- 907 アレクサダーがその薬を飲もうとした時
ちょっと躊躇し、手を止めました
フェリポはそれに気づき、王に考えを変えさせました
王はその薬を飲むことにしました

- 908 王はその薬を飲むと

送られてきた告発状を医者に渡しました
フェリポはそれを見ても気に留めず
細かく破り火に焼べました

- 909 《ご主人様—と彼は言いました—この薬を疑ってはいけません
あなたはこの世でこれ以上上等な薬を飲むことはできない
でしょう
静かにしていれば、すぐに良くなるでしょう
しかし誹謗者は性悪です

- 910 ご主人様、あなたの健康を脅かそうとしたあの者は
できれば喜んであなたを殺すつもりです
あなたに申し上げるこのことはまだ確かめねばなりません
その者は何かあなたに悪いことを仕掛けようとしています
から

- 911 私に嫉妬しているのか、あなたの死を望んでいるのでしょ
う
もしそうでなければ、こんなに大きな悪事を企まないでしょう
ご主人様、その者を信じてはいけません、あなたに忠実ではない
でしょうから
その者自身によって、あるいは他の者によってあなたを死
なせようとするでしょう》

- 912 フェリポの言った事は聞き流されませんでした

王の心に入り、王は非常に感謝しました
王は常々パルメニオに非常な反感を覚えて
彼の死に際してそれをはっきり示しました

- 913 数日で王は回復し
武器を身につけているのを見せるために外に出ました
皆がフェリポ医師に感謝し
彼は良い時に生まれてものだと言いました
- 914 数日で近隣の地方を襲い
降伏しない地方はすべて焼かれました
王はイスモン⁷⁰⁾に多くの武装した兵を送りました
彼らはそこがもぬけの空になっていて、人々が逃げ去った
のを見ました
- 915 今や二人の王はほとんど同じ盤の上にはありました
お互いにはんのわずかな距離しかありませんでした
生まれつきの戦士であるアレクサンダー王は
極めて慎重に事を運ぼうとしました
- 916 アレクサンダー王は臣下たちとどうしたらいいか話しまし
た
ベルシャ人対して打って出るか待つかを
パルメニオの主張が通りました
彼らがどこにしようと討ちに行くと

- 917 貴族のシセネは何も言わなかったので
人々はダリウス王から金を受け取ったのだと思いました
直ちに審議の結果、裁定が下されました
他でもない剣で死んでもらうと
- 918 ギリシャの王たちの中で高位の他の君主⁷¹⁾が
アレクサンダー王と対立し
配下の者たちと共に
ダリウス王の側に付きました、しかしそれは彼の責任では
ありませんでした
- 919 彼はダリウス王に気に入られました、非常に正しいことを
したのですから
王はもし勝てば、彼に大きな報酬を与えると約束しました
しかし王に対しての助言によって
ペルシャ人たちは彼に怒りと大きな不満を抱きました
- 920 《ご主人様—とそのギリシャ人は言いました—私はあなたの家来
で
あなたの恩恵をありがたく感謝しています
しかしあなたの臣下になったからには
私が考えた助言をあなたにしましょう
- 921 アレクサンダー王については彼の術策をお話ししましょう
彼は勇敢な騎士で、勇敢な仲間を引き連れています
彼らは並外れているほどには数は多くはありません

世界に同類はいないと確信します

922 彼らは自分たちは逃げたりしないと確信しているので
勝つか死ぬかの一つだと決めています
その上彼らは親戚同士で、別れ別れになりたくないのです
そういう男たちに向かって行くのは大変なことです

923 その上彼らは戦闘において幸運です
なぜなら前兆で動いており、運命が彼らを導いているから
です
そしてあなたの軍がひょっとして破れたら
アジアにおいてすべてが奪取されると思ってください

924 それ故私は用意周到なことと見ていたのです
あなたが戦いを次の機会に延ばしたことを
というのも打ち破るより前にあなたは大きな被害を受ける
ことになるからです
そして他のことが起れば、大打撃となることでしょう

925 王様、あなたは私の助言に少しも満足していません
あるいは退却するのが誤りだと思いませんか
それでも私はあなたがすることとは別の助言をするのでし
ょう
多くの災いが避けられるようにしてください

926 あなたは大きな富をひとまとめにして持っています

ラバとか車両とか荷を積んだラクダとか
私は賢明だとは思いません、そんなに大きな富を
サイコロの一振りで運に賭けるのは

- 927 もしあなたが望むなら、私はこうするのが良いと思います
その大きな富の中から一番良い部分を
この多くの若者たちの一団と共に
後日までダマスカスに置いておくのが
- 928 もし——神がお望みにならないように——風向きが変わっても
このことで、他のことはいざ知らず、物資は調達ができるでしょ
う
ご主人様、事を抜け目なく慎重に進めてください
他のやり方は、私の判断では、賢明ではないでしょう》
- 929 ティノダは道理を述べたのですが、聴き入れられず
そこにいた者たちから不忠義だと非難されました
——しかし争いがすべて終わったとき
彼らはギリシャ人たちがまともなことを言ったと分かり
ました——
- 930 彼らはギリシャ人たちを確実に罰したかったのです
ギリシャ人たちを生きて逃がしてはいけなかったと言いました
悪い忠告をしたのだから、災いを受けなければならないと
しかし皇帝を説得できませんでした

- 931 ダリウスは言いました：《男たちよ、もう他のことを話そう
私を信じた者が、私のために災いを受けることがないように
に
得をしない時でも、財産を失うことのないように
私が不誠実である時ではない》
- 932 ギリシャ人たちは去り、自分の道を行きました
留まることはあまり安全ではないと見ていたのです
というのはダリウスの全兵士が彼らに非常な反感を覚えていたか
らです
本当のことですが、このことはダリウス王にも重くのし
かかりました
- 933 しかしペルシャ人たちはあの助言に立ち戻ることになり
宝物をダマスカスに運ばせました
しかし婦人たちは王と留まることになりました
—古い法を破りたくなかったのです—
- 934 しかしダリウスは確信していました、次の日には
彼我の境が設けられ
金が払らわれ、集団が組織され
どちらが強いかが分かるだろうと
- 935 両軍の間に小さな山があり
両軍のいる所からちょっと高くなっていました
頂上は平で、緑があり

本当に快適な場所でした

- 936 頂上の真ん中には古い月桂樹があり
その枝は密生しており、幹は非常に丈夫そうでした
非常に水々しいお花畑が一面を被っておりおり
—冬も夏も常に緑でした—
- 937 左側から絶えざる泉が流れ出しており
—自然のものなので、決して水量が細ったりしませんでした—
それはバラの茂みの下で大きな流れになっており
そこを運河のように流れていました
- 938 泉から穏やかな冷気が出ていて
木陰からは柔らかな暖かさが漂っており
木立はとても良い匂いをさせていました
創造主の果樹園のようでした
- 939 心地よい木陰のせいか、泉のせいか
そこに鳥たちが休息にやって来て
そこで毎朝優しい歌を歌っていました
しかしそこには優美な鳥でなければ入れなかったでしょう
- 940 泉の水は^{まきば}牧場^{まきば}の下っについて
それをいつも緑に、色とりどりの花で保っていました
そこには色々な獣がたくさんいました

それらは皆世界中で見らるものでした

- 941 深紅の絹をまとった皇帝は
その場所に移動しようと思いました
大貴族だけから成る大会議を開き
彼らと共に彼の考えについて協議し始めました
- 942 彼の見かけの温厚な表情においてのみ
すべての民に十分に満足しているようでした
誰でも本当に知ることができたでしょう
彼が全オリエントの王であると
- 943 外見上彼を見た人は誰でも
彼のことを知らなくても、それが分かったでしょう
彼に喜びを感じない人は誰もいないし
彼の言葉から大きな満足を感じない人も誰もいません
- 944 彼は言葉の調子を柔らげて、言い始めました
彼は言いました：《同胞諸君、私はお前たちに心を開きたい
特にこの事を神々に感謝しななければならない
このような人々の間で私を生きさせてくれたことを
- 945 私が甘言を弄しているのではないことは神々がご存じだ
私はお前たちが大事だ、他の事は価値がない
なぜなら良き友よりむしろ王国が先に崩れるからである
友を持たない者は貧しく、乞食だ

- 946 それ故神々は私に大きな恵みを与えて下さったと思う
そして見たところ私を非常に愛して下さったようだ
このように忠実な臣下を私にお与えになった時に
私に任された王国を護るために
- 947 もしギリシャ人たちがお前たちがどんな出なのか
あるいはお前たちの曾祖父が戦いにおいてどうだったかを
知ったなら
お前たちがどこに住んでいるのか捜しにこないだろう
しかしまだ彼らはお前たちがどのように身を守るのか分かって
いない
- 948 がっしりした体の巨人で、勇敢な者たちであり
塔⁷²⁾を建てたのはお前たちの親戚である
アレクサンダーは馬鹿で、頭が鈍い
もしそうでなかったら、あのような連中に戦争をしかけたりしな
いだろう
- 949 親戚の値打ちはお前たちをイラつかせるに違いない
その上お前たちをひどく辱める
臣下でありながら、主人ヅラをしたがる
しかし私はお前たちを信じる、そんなことはさせないと
- 950 その上、私たちが恐れるべきものは見当たらない
私たちが神と共にたやすく彼らを打ち負かすことがないのでと
ただ彼らが私たちが彼らを恐れていないことが分りさえすれば

私たちが彼らを打ちのめす前に彼らは戦場を私たちに明け渡してくるだろう

- 951 私が抱いてきた夢をお前たちに話したい
それによると彼らが敗れると確信している
しかし今までそれを隠しておきたかった
からかっているのだと誰かが言わないように
- 952 我々両軍は準備ができていると私は思っていた
皆お互いに睨み合って
火が、怒れる炎が降ってきて
彼らの天幕とすべての宿営を焼いた
- 953 炎は鋭い稲妻のように迫ってきて
兵士たちが握っている槍を焼いた
彼らは馬を失って逃げた
皆拳で頭を叩きながら
- 954 狂人アレクサンダーは、非常に捕えにくい男だが
彼により大きな屈辱を与えるため、私が生きたまま捕えさせた
首に鎖をかけ、捕えれ連れて行かせた
そのことは、私が信じるところによると本当だろう》
- 955 ダリウス王はまだ話しをすっかり終えていませんでした
伝令がやって来て ―彼が呪われんことを―

彼にアレクサンダーが軍を移動させ
皆好き勝手な方向に逃げ出していると告げました

956 その知らせにダリウス王にとっても喜び、兵に乗馬を命じ
丘でも平地でも彼らに追いつくように命じました
アレクサンダーは捕らえることを命じ
バビロニアに贈り物として送ろうとしました

957 しかし彼の喜びはすべて何の価値もありませんでした
というのは伝令の言ったことは皆ウソで
ギリシャ人たちは一歩も逃げようとしなかったからです
むしろ最後の兵まで全員果てたでしょう

958 最初のペルシャ兵たちは待ち伏せの場所の近く
にいました
—もう少しで兵舎の中を襲うところでした—
ペルシャ人たちはマズイと分かって
非常な恐れを抱いてやめました

959 ギリシャ人たちはこのことはすべてもう分かっていました
監視塔が警報を出していましたから
アレクサンダー王は自分は護られていると思いました
しかし一方ではダリウス王はひどく混乱しました

960 ダリウスの一党はひどく狼狽しました
彼らは前進できないほどビクついていました

というのは知っていたからです彼らに知らされた情報が
悪魔によって別な風に変えられていたことを

- 961 アレクサンダー王についてあなたたちに教えたい
—わたしは本当のことを言いたい、このことで過ちを犯すとは思
わない—
彼はどんな作戦を立て、何をし始めたのか
ダリウスの軍が現れるのを見たときに
- 962 アレクサンダーは神に向かって両手を広げ、じっと天を仰
ぎました
《主よ—彼は言いました—あなたはすべてを養ってくださいま
す
あなたの名が誉め讃えられますように
今日あなたはわたしが持っているすべての苦悩からわたしを解放
してくださいました
- 963 主よそのことをあなたに感謝するしかたを知りません
あなたはわたしにこんなに大きな喜びを見せてくれるので
すから
いつもこのことを願い、今日もそうします
それ故にわが町コリントを出たのですから》
- 964 彼は周りにいた臣下たちの方を向き
非常に大きな喜びで話し始めました
《友たちよ—彼は言いました—分かるだろう、創造主に感謝す

るのだ

我々のことはさらに良くなる

965 我々の敵はすべて我々の手に落ちる

彼らを捕らえることを望みさえすれば、彼らは我々のもの
になる

我々のすべての苦しみをここで終わらせる

これを乗り越えれば、我々は決して抵抗を受けなくなるだ
ろう

966 勝利の女神が我々に約束したことを

忠実に果たしてくれた、神に感謝

メノナが破れた時に、彼女は我々に良い出発点をくれた
しかしこれが終着点で、ご褒美だ

967 彼らは皆金銀で武装している

皆輝いていて、着飾っている

神の助けを借りて、これらの者たちは敗者だと思え

というのは立派な手柄をたてるためには、準備ができてい
ないのだから

968 彼らは優れた男たちの身なりをしていない

うぬぼれた女のような

お前たちが聞いたように剣が戦いを制する

そして耐えぬくしっかりした心が

- 969 我々がここに來た理由を思い起こせ
ダリウスから我々が受けた傲慢な仕打ちを思い起こせ
我々も祖先も生まれてこのかた一度も
我々の受けた屈辱の復讐をするこのような機会を得たこと
はない
- 970 私はお前たちが皆このことに満足しているのをよく知って
いる
一つにはお前たちが皆素晴らしい人間だからであり
二番目にはお前たちが私の父に育てられたからである
三番目にはお前たちが私と共に故国を離れているからである
- 971 各々がどのように私を愛しているか見てみよう
一番よく襲撃をかける者が最も私を愛しているだろう
盾を粉々にされた者が
また刃こぼれした剣で強烈な襲撃をかける
- 972 私は富んでいる者にさらに富を加えよう
貧しい者を貧困から引き出そう
奴隷を解放し、自由に生きさせよう
悪人には腐った樹皮も与えないだろう
- 973 私がするのを見た事と違う事をしないでほしい
私が前にいない時は、ついてこないで欲しい
しかし私が襲撃をかける時は、お前たちもそうして欲しい
お前たちが私をどのように守るのか見てみたい

- 974 私はお前たちに手短かに考えを述べたい
私たちには長い話をする時間はないのだから
すべての戦利品から何もお前たちから取り上たくない
私は十分に名誉を持っている、これ以上欲しくない》
- 975 彼の言葉が彼らを非常に熱くしました
—ただ彼の言う事が理解できませんでした、それほど彼ら
は興奮していたのでした—
すべての者がペルシャ人たちを攻撃しようとしていて
簡単に勝てると思っていました
- 976 王はいつものように軍を整えました
優れた側面と、しっかりした前衛を
各々自分の戦線を護るように
まさかりを休ませることのないように命じました
- 977 王は前衛に歩兵の壁を作りました
それを破ることはつるはしでも鎌でもできなかったでし
う
王と同郷の生え抜きの臣下たちは皆
その魂よりも命を失ったでしょう
- 978 軍の右翼はニカノルに任されました
多くの貴族と多くの高潔な戦士たちと共に
そしてクリトゥスとトロメオが各々自分の部隊と
さらにペルディカスが他の華々しい戦功のある三人と

- 979 素晴らしい隊長であるパルメニオが指揮していました
息子のフィロタスと共に左通路を
三番目は城なみのアンティゴヌスでした
それと高名で小柄なクラテルス
- 980 ギリシャ人の軍はこのように準備されていました
武器と人で十分に強化されていて
お互い非常にしっかり結び合わされていました
しかし王が最初の攻撃を仕掛けました
- 981 ダリウス王は自分が騙されたと思って非常に苦悩していま
した
心臓が波打ち、悪魔を呪っていました
彼にその知らせを持ってきた男を探すよう命じました
もしその男を見つけたら、追放されたでしょう
- 982 ダリウス王はすべての兵に野に待機するよう命じ
自ら閲兵し始めました
彼らに静かに後衛を待つように命じました
というのはふさがれた通路を通らなければならなかったか
からです
- 983 兵士たちが到着した時、王は彼らを励ましました
《男たちよーと彼は言いましたー、私たちは幸運な人間だと思お
う
もし私たちがこんなに早く着かなかったら

ギリシャ人たちは立ち去って完全に散々になっていたと知りなさい

984 しかし我々の主は大きな慈悲を示され
今日我々を我々の地の主人にしてくださる
我々はギリシャ人たちを死なしめ
彼らは決してこの世で自由を得ることはないだろう

985 どうなるか、お前たちに言っておきたい
逃げられないように彼らを真ん中にして取り囲もう
彼らは逃げようとしてもどこに行ったらいいか分からないだろう
囚われの身か死ぬことになるだろう》

986 ダリウス王は周到な助言を十分にしました
しかし神々が命じたのとは別のやり方で
不運にも彼のは認められませんでした
運命の車軸が狂っていたからです

987 人の考えはまったく虚しいものです
我々の考えは安定性がありません
我々の分別は弱さに過ぎないからです
神が慈悲から我々に備えてくださっているもの以外は

988 力も勇気もお金も
神に見放された者には価値がありません
神に喜ばれる者こそ良く導かれるのです

神が見放す者はまったく絶望的です

- 989 他の事と共に我々が話すのが適切です
非常に貴重なダリウス王の武器について
それらは美しく見えて頑丈な作りで
持ち運ぶのには軽いが、あまり運が付いていません
- 990 盾には多くのきれいな物語が描かれていました
バビロニアの王たちが成し遂げた功しの物語です
そこには巨人たち⁷³⁾の全ストーリーが描かれていました
言葉の混乱が起きた時の
- 991 一方の側にはカルデアの王が描かれていました
ユダヤを征服したネブカドネザルです
どのように彼がシオン、トリボルとタバレアを征服したのか
そしてユダヤの民にどれほど多くの屈辱を与えたのか
- 992 どのように聖都の寺院を破壊したのか
どのようにその民々が虜になったのか
どのようにその王に対してそのような残酷な事をしたのか
彼から目をえぐり出したのです、本当のことです
- 993 武器が汚されないように
そのような話は—有害にならないように—
絵師がそこに描かれる事を望みませんでした
なぜならそのような話で正当な話が醜くなるからです

- 994 ダリウス王はそこに描かれることが適当だとは思いませんでした
 ネブカドネザルがなぜ気が狂ったのかを
 というのは七年間記憶がなかったのです
 しかし結局意識をすべて取り戻しました
- 995 絵師はそこにネブカドネザルの邪悪な息子を描こうとはしません
 でした
 彼は父に対して残酷で恥知らずでした
 そして父を切り刻みました、その事が絵師にはひどい事に思えた
 のです
 その呪われた男は自分一人で支配したかったからです
- 996 しかし結局繊細に描かれていました
 ベルシャの良き王国ががどのように始まったのか
 不可解な文章を書いた手⁷⁴⁾と
 バルタサール⁷⁵⁾が下した決断が
- 997 シロ⁷⁶⁾の物語があたりに描かれていました
 すべて彼の剣でどんな偉大な征服を成し遂げたのか
 どのようにしてイスラエルの民が解放されたのか
 クレスス⁷⁷⁾は戦争でなぜ何も勝ち得なかったのか
- 998 シロが山でどのように密かに育てられたのか
 どのような方法で町に連れて来られたのか
 しかし最後にすべてが終わった時
 一人の夫人が戦闘で彼を殺しました⁷⁸⁾

- 999 決して人はこの世を信じるべきではないでしょう
それは事をこんなに悪い結果に導く術を知っています
それは自分の友たちを大事な場所に置くことを知っています
最後に彼らをよりひどく打ち砕くことができるように
- 1000 シロは陸でも海でも強力でした
神は彼に強運と勝つための多くを与えました
しかし彼が得たすべても彼を護れませんでした
最後に一人の女が彼を殺すことになったのです
- 1001 有り得るどんな富も
人は決して神の事柄をその下に置くべきではないでしょう
容易に与える者は容易に取り去ることができるからです
そして最後には神とすべての財産を失うことになります

注

- 59) 動物の血からとったインクで、脅しを込めて
60) ペルシャに仕えるギリシャ人傭兵、実際は病死であったようである
61) ユダが銀三十枚でキリストを渡したことから
62) 現在のトルコのサルト、当時はリディアの首都でペルシャの支配下にあった
63) トルコの北西を流れる大河
64) 現在のアンカラ
65) ナイル河の河口近くにあった町
66) 鷲とライオンを合わせた神話上の動物
67) 聖書の影響か、新約聖書コリントの信徒への手紙二 12, 2
68) 聖パウロのこと、ここでも時代が飛んでいる
69) 小アジアの南東の沿岸、現在のトルコ

- 70) シシリアの町
- 71) テイモデスのこと
- 72) 旧約聖書に出てくるバベルの塔のことで、ここでも時代背景が飛んでいる
- 73) ギリシャ神話でオリンポスの神々と戦ったギガス（巨人）
- 74) 旧約聖書ダニエル書 5 章
- 75) ネブカドネザルの息子
- 76) アケメネス朝ペルシャの開祖シルス 2 世大王
- 77) リディアの王、シルスに敗れた
- 78) カスピ海の東にいた種族の女王 Tamiris

参考図書・辞書

- Libro de Alexandre Real Academia Española Madrid 2014
- Libro de Alexandre Nueva Biblioteca de Erudición y Crítica Editorial Castalia Madrid 2007
- Libro de Alejandro Editorial Castalia Madrid 1985
- Book of Alexander Peter Such and Richard Rabone Oxbow Books Oxford 2009
- Vocabulario de Libro de Alexandre Anejos del Boletín de la Real Academia Española Madrid 1976
- アレクサンドロスの書・アポロニオの書 橋本一郎 大学書林 1991
- Diccionario Medieval Español Martín Alonso Universidad Pontificia de Salamanca 1986
- Diccionario de Castellano Antiguo Manuel Gutiérrez Tuñón Editorial Alfospolis 2002
- Tentative Dictionary of Medieval Spanish Lloyd A.Kasten and Florian The Hispanic Seminary of Medieval Studies New York 2001
- Larousse Universal diccionario enciclopédico Librairie Larousse Paris 1968